

第70回 歴史リレー講座「能のふるさと大和」大槻文蔵氏(R2.7.19)

本日のタイトルは「能のふるさと大和」でございます。

能の初期に於いて大和は大変重要な位置を占めております。まづ現在在る能の流儀の主なものは大和で興った能の座(集団)であります。そして、能の作品の中にも大和に関係する曲が多くあることです。

現在は能楽と云っておりますが、江戸時代迄は猿楽又は猿楽の能と呼んでおりました。その後は能と云い、能楽と云う呼称は近年であります、室町時代には田楽の能も盛んで、他にも風流・延年・今様・白拍子と様々な芸能に満ち溢れてました。

私たち能楽師の仕事は各役が専門性になっており、生涯を通して同じ職掌に就きます。分類すると主人公であるシテ方、相手役のワキ方、狂言方、そして囃子方は笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方です。各役にそれぞれ流儀がありますが、シテ方には5つの流派(観世流、宝生流、金春流、金剛流、喜多流)があり、私はシテ方観世流を務めています。現在は〇〇流と呼ばれております流名は、以前地名を冠してました。

能楽の大成者観阿弥(1333~1384年)と世阿弥(1363~1442年)親子で知られる観世流は南北朝時代に活動していた山田美濃大夫の養子に観阿弥がなり結崎座として活躍。

田原本ゆかりの金春流は円満井座と呼ばれました。外山座に由来する宝生流は桜井を本拠地とし、観世流とは姻戚関係にあります。坂戸座と呼ばれた金剛流は生駒の平群付近が本拠地。以上が室町時代の和ではほぼ同時期に興った、いわゆる和四座です。のち江戸時代に喜多流が徳川秀忠の後援を受け一流創設が認められ、喜多流を名のり、これより四座一流となりました。

能の演目を大きく分けると神話の世界の「脇能」、武士が主人公の「修羅物」、女性が主役の「せん物(部首かみかんむりに受)」、子や恋人を探し求め彷徨い歩く「狂女物」、天狗や鬼、龍、狐など賑やかな舞台が繰り広げられる「切能物」と五つのジャンルに分けられます。昔は一日に四番~六番もの能が演ぜられ、それぞれのジャンルから選曲されて一日を構成しておりました。

「脇能」は神社の由来、御代の祝福、治政の称賛が語られます。「修羅物」は源平の侍が主役ですが、死後に修羅道へ墮ち戦の苦しみを訴えてくるものです。「せん物」じゃ王朝の貴族たちが恋の苦しみ、辛さを語り、また植物の精が現れ、生きとし生ける者すべてが成仏できる悉皆成仏の思想を語るものなどありますが、いずれも優美な舞を閑かに舞うものです。「狂女物」は行方がわからなくなってしまった我が子、恋人などを尋ね求めるものであります。傍目も気にせず一途に訪ね求める姿は他の人には狂気の様に見えるところから狂女物と呼ばれます。この枠には他に能面を使用しない直面物と呼ばれる曲や、中国を題材にした唐物などいろいろと含まれています。切能は一日のフィナーレにふさわしくテンポも早く賑やかな楽しい曲が多くあります。

和を題材とした能では最も古いものが、1384年以前に創られた観阿弥の「吉野静」です。また喜阿弥の「雲雀山」もほぼ同時期の古い作品です。その後1400年代になり井阿弥

の「二人静」、世阿弥の「当麻」「布留」「采女」「野守」、そして次世代になり世阿弥の嗣子元雅の「吉野山」、世阿弥の娘婿の円満井座の金春禅竹の「龍田」「三輪」「春日竜神」「玉葛」など枚挙にいとまがありません。

猿楽が大きな発展を遂げた要因は、観阿弥の創意工夫と優れた芸はもちろん、幼少期から美少年と謳われた世阿弥の存在が大きいです。

1374年京、今熊野での演能の折、三代将軍足利義満に認められたことをきっかけに猿楽は諸国に広まりました。観阿弥は物真似が主体であった大和の芸に、曲舞というリズム感のある音曲を採り入れました。

世阿弥最大の功績は猿楽に歌と舞を採り入れ歌舞劇を作り出したことです。歌と舞が加わることでストーリー性が優れた猿楽は、音楽劇即ち現代の「ミュージカル」に進化しました。

また、作劇法としては、現在から過去に時間を遡らせるという作り方です。この世に想いを残した人は死後成仏の妨げとなり、その靈魂は彷徨っています。旅の僧の前に現れた人物は所にまつわる古い話を語ったのち、自分がその者であるとのめかし消え去ります。夜に入り弔いをする僧の夢に、在りし日の姿で現れ、昔を語り、弔いを喜び、報謝の舞を舞う内に夜も明けてゆき、僧の夢は覚めるというもので「夢幻能」と呼ばれています。人の心の奥深くに残る心理を訴えるものであり、世界中にも稀らしい演劇手法で能が世界無形文化遺産に認定されている大きな要因であります。

世阿弥のこの「夢幻能」の作り方は娘婿の金春禅竹に大きく引き継がれ、禅竹は「定家」「野宮」など大変優れた作品を残しています。猿楽の能と世阿弥に魅了された義満はすぐさま猿楽を全面的に支援、世阿弥は義満の手篤い庇護のもとめざましい活躍をしました。華やかな北山文化を築いた義満は元来文化芸術感覚の鋭い人であったと思われれます。彼が猿楽の舞台に魅了されるというのは当然でありうなずけることであります。世阿弥は作能の他にも現代に通用する演劇論を著し(これが数か国語に翻訳され各国で高い評価を受けている)たり、猿楽の興行も数多く行い、順風満帆の時代が続きました。

しかし、一大庇護者である将軍義満が没し、次の将軍義持になり、義持の義満の反意識は格別なもので義満のしたあらゆるものを打ち砕いていきました。当然世阿弥はやり玉に上り、義持は田楽の増阿弥を採り立てました。その後義持は将軍職を義量に譲りますが、義量は19歳の若さで死去、再び義持が執政を行いました。まもなく急逝し、次の第六代将軍には青蓮院にいた義円が還俗して義教と名乗り、将軍に就きました。

義教は以前より世阿弥の甥の三郎元重音阿弥を重用していました。この頃は世阿弥を元重との関係は大変悪く、そして世阿弥の嫡男元雅が若くして伊勢で急死。

元雅の死後は元重が観世大夫を襲名。世阿弥の座は次々と圧迫を受けます。世阿弥の不運はこれだけで終わらず、明確な理由は判りませんが、義教の怒りを買って、72歳(1434年)という高齢で佐渡へ流されています。2年後に著した「金島書」は島での心境を綴ったもので小謡風になっています。享年81歳という高齢ですが、許されて京か大和かへ戻れたのか、佐渡で亡くなったのかは定かではありませんが、栄枯盛者大変な一生を送った人でした。